令和８年３月 25 日
目黒区立中根小学校

令和７年度　自己選択学習の時間ほか，教育活動に関する成果検証について

以下に，令和 6 年度と令和 7 年度の児童を対象にしたアンケート調査の結果を総合して報告します。

1.　目的

「学習の原則」に関する児童の変容から，令和６年度から令和８年度まで文部科学省の研究開発学校制度の指定を受けて取り組んでいる「自己選択学習の時間」ほか，教育活動の成果を検証することを目的とします。

2.　学習の原則とは

ミネルバ大学が提唱している学習方法のことです。学習の原則は 16 項目あり，各項目は学習科学の知見が援用されています。教育心理学を専門とする大学研究者の協力を得て，児童でも分かるような平易な言葉で本調査項目を開発しました（表 1)。

表１　「学習の原則」の質問紙調査項目

No.	質問項目
1	学習内容について，自分の言葉で説明できるようにしている。
2	学習している内容は，簡単すぎず，難しすぎず，ちょうどいい。
3	学習した内容を覚えているか，自分で自分にテストをしている。
4	先生や友達から，できている点やできていない点について，アドバイスをもらうようにしている。
5	同じ教科の学習ばかりするのではなく，交互に学習している。
6	聞く・読む・見るなど，色々な方法で覚えている。
7	楽しみながら学習をしている。
8	学習した内容どうしの関係を，図や表にまとめて覚える。
9	新しく学習する内容は，前に学習した内容とのつながりを考える。
10	学習するとき，分かりやすい内容から理解し，それから難しい内容を理解するようにしている。
11	学習するとき，自分なりに例を考えている。
12	学習するとき，「そもそも」や「なぜ」について考えるようにしている。
13	学習内容の流れや全体像をふまえて，学習内容を覚えている。
14	短い時間で学習しようとせず，長い時間をかけて，学習した内容どうしを関係づけて覚えている。
15	学習した内容が，その教科の学習場面以外でも活用できるか考えている。
16	かたよった考え方をしていないか，自分の考えに意識を向けるようにしている。

3. 学習の原則を援用した理由

「自己選択学習の時間」では，本などを使って調べる学習をします。教科等の学習と異なり学際的に学習することから，「学び方を学ぶ」という児童の学習方法に関する意識の変容で成果を検証しています。

4. 調査対象

小 3 から小 6 の児童を対象にしました。なお，小 1 と小 2 の児童の取り組みに関する成果の検証は，令和 6 年度の 3 年生と令和 8 年度の 3 年生を比較分析する予定です。

5. 調査時期

令和 6 年 7 月，令和 7 年 2 月，令和 7 年 7 月，令和 8 年 2 月と 4 回実施しました。なお，「自己選択学習の時間」は，令和 6 年 9 月から取り組み始めています。

6. 調査方法

5 件法 (5. よくあてはまる, 4. あてはまる, 3. どちらともいえない, 2. あてはまらない, 1. まったくあてはまらない）で回答を求め，4 回の調査結果を統計処理しました。

7. 分析結果

4 回の調査時点について分析し，表 2 にまとめました。本分析の対象は，4 回すべての調査に回答した小 4 から小 6 の児童 154 名です。表 2 は，各質問項目について，4 時点の平均値と標準偏差を示しました。また，時点による差を検討するため，分散分析を行い，主効果の F 値と p 値を示しました。

表 2　「学習の原則」質問項目に関する回答結果の推移と分散分析結果【N = 154】

質問	R6.7	R7.2	R7.7	R8.2	F 値	p 値
1	3.88(0.86)	3.97(0.84)	4.01(0.86)	4.08(0.88)	3.01	.03*
2	3.77(1.07)	3.83(1.05)	3.90(1.03)	3.77(1.09)	0.93	.424
3	3.31(1.26)	3.27(1.34)	3.23(1.21)	3.23(1.24)	0.22	.881
4	3.47(1.10)	3.66(1.19)	3.47(1.19)	3.57(1.15)	1.64	.181
5	3.96(0.98)	3.87(1.02)	4.13(0.84)	3.83(1.18)	4.19	.008**
6	4.08(0.91)	4.07(1.03)	4.15(0.94)	4.08(0.95)	0.31	.811
7	4.07(1.07)	4.18(1.05)	4.30(1.03)	4.14(1.10)	3.02	.037*
8	3.42(1.09)	3.32(1.17)	3.27(1.25)	3.25(1.16)	1.09	.353
9	3.66(1.03)	3.65(1.10)	3.78(1.06)	3.77(1.07)	1.10	.349
10	3.99(0.95)	3.81(0.98)	4.00(1.05)	4.05(0.95)	2.50	.059†
11	3.84(0.99)	3.85(1.04)	3.91(1.07)	4.02(0.99)	1.54	.203
12	3.65(1.16)	3.85(1.05)	3.85(1.03)	3.87(1.05)	2.46	.064†
13	3.76(0.88)	3.84(1.04)	3.89(0.99)	3.85(0.97)	0.87	.455
14	3.43(1.13)	3.46(1.14)	3.67(1.11)	3.50(1.09)	2.57	.054†
15	3.85(0.93)	3.88(0.96)	4.01(0.95)	3.78(1.00)	2.47	.063†
16	3.85(1.02)	3.82(1.00)	3.81(1.05)	3.79(1.09)	0.14	.934

$^{**}p < .01$　$^{*}p < .05$　$^{\dagger}p < .10$

8. 考察

分散分析の結果，質問 1，質問 5，質問 7 において主効果が有意でした。有意だった質問について Holm 法による多重比較を行いました。

質問 1 は，令和 6 年 7 月と令和 8 年 2 月の間に有意差が認められました($p = .03$)。その他の時点間には有意差は認められませんでした。すなわち，児童がこの 1 年半で取り組んだことは，「学習内容について，自分の言葉で説明できるようにしている」という学習の方法に改善が見られた可能性が示されました。

質問 5 は，令和 7 年 2 月と令和 7 年 7 月の間($p = .007$)と令和 7 年 7 月と令和 8 年 2 月の間($p = .006$)に有意差が認められました。その他の時点間には有意差は認められませんでした。「同じ教科の学習ばかりするのではなく，交互に学習している」という学習の方法は，令和 7 年度の前期期間に 1 度は改善が図られたものの，その効果は継続せず，令和 7 年度の後期には元の状態に戻りました。このことは，学年が上がり，さまざまな教科等を学習することで新たな期待感が前期期間に生まれたものの，次第に自分自身の好嫌や，長短を把握し，学習内容に偏りが出てきたことが示唆されました。今後，前期期間の学習方法に関する意欲を後期期間にどのように継続するかが課題になります。

質問 7 は，令和 6 年 7 月と令和 7 年 7 月の間に有意差が認められました($p = .007$)。その他の時点間には有意差は認められませんでした。「楽しみながら学習をしている」という学習の方法は，この 1 年間で改善が見られた可能性が示されました。「楽しむ」に現れる意欲は，自己調整力を高めるための大切な要因です。今後も楽しいと児童が感じられる教育活動を実施することが求められます。

また，質問 14 において主効果は有意傾向でした($p = .054$)。参考として多重比較を行ったところ，令和 6 年 7 月と令和 7 年 7 月の間に有意差が認められました($p = .046$)。このことから，「短い時間で学習しようとせず，長い時間をかけて，学習した内容どうしを関係づけて覚えている」という粘り強さや多角的なものの見方に関する学習の方法は，取り組みから 1 年経過し徐々に養われてきている可能性が示唆されました。さらに，質問 10 と質問 15 においても主効果は有意傾向でしたが，参考で行った多重比較では，いずれの項目においても有意差は認められませんでした。来年度も本調査を継続し，効果を検証してまいります。

9. 今後の展開

本分析結果に基づき，令和 8 年度の重点項目を抽出します。まず，質問 3「学習した内容を覚えているか，自分で自分にテストをしている」です。質問 3 の調査結果では，標準偏差が 4 回の調査でいずれも大きく，この学習の方法については，できている児童とできていない児童の差が大きくばらついていることが分かりました。したがって，質問 3 について，改善を図る必要があります。学習科学の研究では，学習した内容を読み返したり見直したりするだけでは，「分かったつもり」になりやすいことが指摘されています。この

ような状態は「流暢性の幻想」と呼ばれ，その場では理解できたように感じても，時間が経つと十分に思い出せないことが少なくありません。これに対して，自分で問題を出して思い出す「自己テスト」は，記憶を呼び起こす働きを通して，学習内容をより確実に定着させる効果があることが知られています。このことから，本校では家庭学習の場面において，自分で自分に問題を出すなど，自己テストを取り入れた学習習慣を身に付けることができるようサポートしてまいります。

次に，質問 8「学習した内容どうしの関係を，図や表にまとめて覚える」です。質問 8 の調査結果は，平均値が低いです。令和 7 年度も重点に置きましたが，改善が見られませんでした。自己選択学習の時間でエッセイを書くときは，比べたことを表にしてまとめたり，図を活用して分かりやすく視覚的にまとめたりする指導を徹底してまいります。

10. 本取り組みの限界

本取り組みは，令和 6 年度から令和 8 年度まで文部科学省の研究開発学校制度の指定を受けて取り組んでいます。「自己選択学習の時間」では，自分の課題に基づきエッセイを書くという学際的な学習に取り組んでいます。その効果を「学習の原則」という 16 項目の児童アンケート調査の調査結果を分析することで検証しています。

しかしながら，児童は，「自己選択学習の時間」だけではなく，教育活動全体を通して学習の方法を習得していますし，学校外の諸活動の中でも学習の方法を習得している児童もいます。

このことから，「学習の原則」の児童の変容が，示唆的ではあるものの，「自己選択学習の時間」を要因とする成果だとか，学校教育活動を要因とする成果だなどとは，一概に言い切ることはできません。ただし，教授する教員も学習する児童も教育活動を通して学習の方法を変容させようとすることに価値があることに変わりはないと考えます。

2030 年頃からの新たな学習指導要領では，現在の目黒区の取り組みの導入が見込まれており，全国的にも大変注目度の高い取り組みです。全国のフロントランナーとして，本研究の最終年となる令和 8 年度も，本取り組みを充実させてまいります。引き続き本校の教育活動へのご理解とご協力を賜りますようどうぞよろしくお願いいたします。